

念仏の奥義

江 上 淨 信

一

るなかのひとくくの文字のこゝろもしらず、あさましき愚癡きわまりなきゆへに、やすくこゝろえさせむとて、おなじことをとりかへし／＼かきつけたり。こゝろあらむひとは、おかしくおもふべし、あざけりをなすべし。しかれども、ひとのそしりをかへりみず、ひとすぢにおろかなるひとくくを、こゝろへやすからむとてしるせるなり。(親全・和文篇・一五二)

「たゞごせの事はよき人にもあしきにも、おなじやうにしやうじいづべきみちをば、ただ一すじにおほせられ候しを、うけ給はりさだめて候し」(親全・書簡篇・一八七)親鸞は八十五歳の老齡を迎え、老衰漸やく加わり、しかも身辺多事多難、文字通り荆棘の道を辿りつつ、慈懷を一切の群生、田夫野叟の上に灑ぎ、ひたすら念仏のいわれを説き続けたのである。このことは容易のようでありつつ決して容易ではない。ひとつことを繰りかえすということは無意味のように思えるかもしれない。それが知性の立場であるといえよう。しかし、信仰の原点に立つものには、「おなじことをたび／＼とりかへし」ひとすじに繰りかえすよりほかはない。ただそれだけがあるというものを打ち出すところに、人々の心を衝つものがあるのではなからうか。

法然においては

たゞ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申て疑なく往生するぞと思ひとりて申外には別の子細候はず。(聖全・四・四四)

であり、親鸞においては

たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。(親全・言行篇(1)・五)

と、ただ念仏以外には何もなかったものであり、多くの聖教はただ念仏のいわれを明らかにすることのほかはない。「ただ往生極樂のためには南無阿弥陀仏と申て」といい、「ただ念仏して」と「たゞ一すじにおほせられ」ところには、如来の願言が聞信されていたのであり、それは無為自然の音声であるといっているであろう。かくの如き自然に帰する宗教体験こそが、生死罪濁の群萌をして真実に各々安立せしめるのである。而してその自然に帰する宗教体験が法然において如何に表現され、親鸞に如何に受容されたのであろうか。ここでは念仏の奥義としての選択本願念仏を中心に若干の考察を試みたい。

二

法然自身「われ浄土宗をたつる心は、凡夫の報土に、むまるゝことを、しめさんがためなり」(法伝全・二七)と明言するように、法然によって開かれた浄土宗は、あらゆる凡夫に開放された仏教であり、「善導の釈義」にもとづき、報土即ち阿弥陀仏の浄土に往生する具体的実践行としてすすめた専修念仏は如来選択本願による称名念仏であった。而して法然が特に仏願に乗托して「ただ念仏すべし」と教示した基盤は、「我は三字の器にあらず」といい、「十悪の法然房、愚痴の法然房」と悲歎された深い人間的自覚であった。そしてそれはまた比叡の山に登り学道するさえ閉ざ

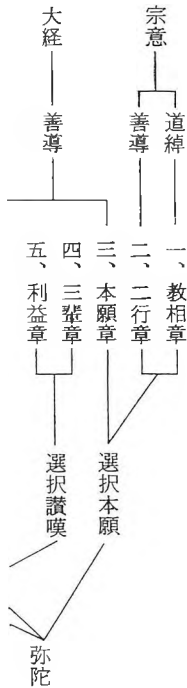
れていた民衆の心に触れるものであった。まことに罪惡を重ねて生きるほかなかった民衆にとって、自らが三学の器でなく、愚惡の凡夫以外のなにものでもないことは、そのまま肌感ぜられる自覚であり、その愚痴の身が本願の誓約によって、念仏するのみで救われるということは、何という素晴らしい教説と聞こえたであろうか。吉水の禪房が当時の教界の渦の中心になったことは当然のことといわなければならない。

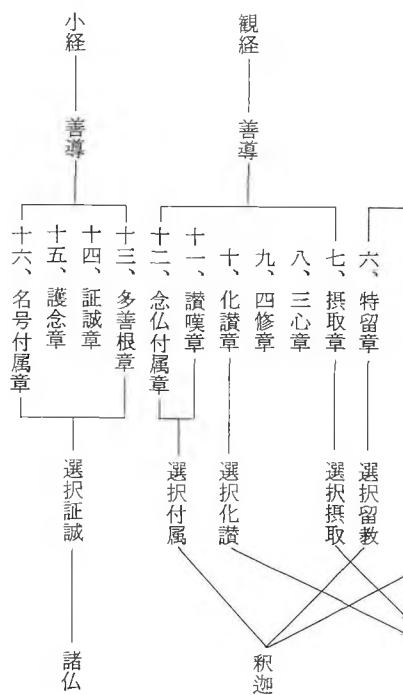
「粟散片州に誕生して、念仏宗をひろめ」、「涅槃のかどおぼひらきける」（親全・和讃篇・一三二、一三四）法然の教えの眼目は「選択本願念仏」にあるといっている。その宗意は『選択集』全十六章に詳説するところであるが、第十六・名号付属章には

私に云はく。凡そ三經の意を案するに、諸行の中に、念仏を選択して、以て旨帰と為す。（聖全・一・九八八）
 として、『大經』に「選択本願」「選択讚歎」「選択留教」、「觀經」に「選択撰取」「選択化讚」「選択付属」、「小經」に「選択証誠」、「般舟三昧經」に「選択我名」のいわゆる八選択をまとめ、さらに

本願と撰取と我名と化讚と、此の四は是れ弥陀の選択なり。讚歎と留教と付属と、斯の三は是れ釈迦の選択なり。証誠は、六方恒沙の諸仏の選択なり。然れば則ち、釈迦・弥陀及び十方の各恒沙等の諸仏、同心に念仏の一行を選択したまへり。余行はしからず。故に知んぬ、三經共に念仏を選びて、以て宗教と為すのみ。（眞全・一・九八九）

と結んでいる。『選択集』十六章と七選択の關係を图示すれば次の如くである。





このように、法然においては選択ということこそ『選択集』を一貫する特色であるが、それはどのように開頭されているのであるうか。

勿論、選択という語は『大無量寿経』の異訳である『大阿弥陀经』に基づくものである。「弥陀如来、余行を以て往生の本願と為したまはず、唯念仏を以て往生の本願と為したまへるの文」と標章する第三・本願章には『大经』および『大阿弥陀经』の文を引き、

此の中に選択といふは、即ち是れ取捨の義なり。謂く、二百一十億の諸仏の浄土の中に於て、人天の悪を捨てて人天の善を取り、国土の醜を捨てて国土の好を取るなり。『大阿弥陀经』の選択の義、是くの如し。『双卷经』の意もまた選択の義あり。謂く、二百一十億の諸仏の妙土清浄の行を撰取すと云へる、是れなり。選択と撰取と、其の言異なりと雖も其の意は是れ同じ。然れば不清浄の行を捨てて清浄の行を取るなり。上の人天の善悪、国土の麗妙、其の義また然なり。これに準へてまさに知るべし。(聖全・一・九四一〜二)

という。而して「夫れ四十八願に約して、一往おのおの選択撰取の義を論ぜば」として、第一無三惡趣の願から第四無有好醜の願を例示して選択の意趣を述べ、第十八念仏往生の願については、諸仏の土の中には布施・持戒乃至孝養父母など、その往生行は種々不同でつぶさには述べられないが、諸行を選捨て「専称仏号」を選取るから「選択」というのであるとし、しからば何故第十八願に一切諸行を選捨て、ただひとえは念仏の一行を選び取り往生の本願とされたのか、という正しく念仏選択に関する核心的な問いを提起して、

答へて曰く。聖意測り難し、輒く解すること能はず。然りと雖も今試に二義を以てこれを解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。(真全・一・九四三)

と、ここに勝劣難易の二義を以て選択本願の義意を明らかにせんとする。阿弥陀の本願には我が名号を称えんものを浄土に往生せしめんと誓い、積功累徳の修行を通して、その功徳を衆生に廻施したまうのである。この功徳廻施のために名号中に一切の功徳を撰めて、これを衆生にあたえたまうのである。ここに勝劣難易の二義をもって、かくのごとき願心を明らかにせんとするのである。

勝劣とは阿弥陀の名号そのものが万徳の帰するところであり、名号には弥陀の内証・外用の功徳が悉く撰まれているのに対して、余行は各々一隅を守るにすぎないことを説き、「然れば則ち仏の名号の功徳は、余の一切の功徳に勝れたり、故に劣を捨て勝を取りて、以て本願としたまふか」(真全・一・九四四)と本願の名号がまことに超世無上の功徳を持つことを明示している。しかも積功累徳して万徳円備の名号を成就したまうのは、偏えに「為衆開法藏広施功徳宝」のためであって、本願の念仏はただ十方衆生のための大悲廻向の行なのである。それ故に「念仏は是れ勝、余行は是れ劣」として、その念仏をただちに名号として、「名号は万徳の帰する所」と願示したのである。ここに本願力の回向の名号が選択本願の念仏であることを教示している。

次に難易について、念仏は修しやすく諸行は修し難いことをいい、「然れば則ち一切衆生をして、平等に往生せし

めんがために、難を捨て易を取りて本願としたまふか」(真全・一・九四四)と説く。かくて

まさに知るべし、上の諸行等を以て本願と為したまはば、往生を得る者は少く、往生せざる者は多からん。然れば則ち阿弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せんがために、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と為したまはず、ただ称名念仏の一行を以て其の本願と為したまへり。(真全・一・九四五)

と、称名念仏の一行を以て往生の本願とせられたことを明説している。

上述の如く、法然は選択をまず法蔵菩薩の発願に見出し、本願において諸行を選捨て称名念仏の一行を選択されたのは、「平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せんがため」という。それは決して排他的独善的偏向を意味するものではない。一切を包容し、一切を真実に生かしめるべき願力撰取のはたらきとしての阿弥陀如来の慈悲を明確に示すものである。法然はさらにその選択は弥陀・釈迦・諸仏が同心に選択されたものであると説くのである。而して法然はこの仏の選択において、衆生の選択の決断をせまるのであって、総結三選の文がそれである。

夫れ速かに生死を離れんと欲はば、二種の勝法の中に、且く聖道門を闔きて選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲はば正雜二行の中に、且く諸の雜行を抛ちて選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば正助二業の中に、猶助業を傍らにして選びて正定を専らにすべし。正定之業とは、即ち是れ仏名を称するなり。称名は必ず生を得。仏の本願に依るが故に。(真全・一・九九〇)

この衆生の選びとしての宗教的決断をせまる根拠こそは、まさしく「仏の本願に依るが故に」ということに外ならない。これは善導の「散善義」の「一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近を問はず、念々に捨てざるは是れを正定の業と名づく。彼の仏願に順ずるが故に」(真全・一・五三八)という意を承けたものである。法然はこれについて二行章に問答を設け次のように説く。

問て曰く。何が故ぞ、五種の中、独り称名念仏を以て正定の業とするや。答へて曰く。彼の仏願に順ずるが故

に。意に云く。称名念仏は是れ彼の仏の本願の行なり。故にこれを修する者は、彼の仏願に乗じて必ず往生を得るなり。(真全・一・九三五)

ここに善導の「順彼仏願故」の教言を「依仏本願故」「乘彼仏願」と積極的に開示していることは、末代濁世の群萌の依つてたつ普遍性を獲得するに至つた仏道として留意しなければならない。法然の著作法語を通じて「本願故」の言葉がどれほど繰り返されいることであろうか。

三

思うに、称名念仏の一行が必得往生の行であることは、弥陀の選択本願に基づくのであるが、これが衆生の選びになるためには、法然は選択讚歎、選択留教、選択付属という積尊の選択において、われわれの現実の衆生界に説かれなければならないと見ている。第十二・念仏付属章に「積尊、定散の諸行を付属したまはず、唯念仏を以て阿難に付属したまふの文」(真全・一・九七五)と章題し、『観経』流通の文について善導の疏文によって私積をしている。

まさに知るべし、積尊、諸行を付属したまはざる所以は、即ち是れ弥陀の本願にあらざるが故なり。また念仏を付属したまふ所以は、即ち是れ弥陀の本願なるが故なり。今また善導和尚、諸行を廃して念仏に帰せしむる所以は、即ち弥陀の本願たるの上に、また是れ積尊付属の行なればなり。故に知りぬ。諸行は機にあらざして時を失へり。念仏往生は機に当りて時を得たり。感応あに唐捐ならんや。まさに知るべし、随他の前には暫く定散の門を開くと雖も、随自の後には還つて定散の門を閉づ。一たび開きて以後、永く閉ぢざるは、ただ是れ念仏の一門なり。弥陀の本願、積尊の付属、意ここに在り。(真全・一・九八二―三)

と説き示しているのは、まさにこのことを意味するといつていいであろう。而して『大経』の意趣により「故に知んぬ、念仏往生の道は正像末の三時及び法滅百歳の時に通ずといふことを」(真全・一・九八三)と結び、末法という時機

の痛みを通して正像末の三時を貫く永遠の真実として、選択本願念仏の仏道の絶対・普遍性を明瞭に開示している。

法然の選択本願論は、法語等の上に随所に語られているが、殊に『三部経釈』と『逆修説法』『法然聖人御説法事』に詳説を見ることができる。『法然聖人御説法事』は『西方指南抄』に収められ、その内容は『逆修説法』と大体一致し、承元の法難に坐した死罪四人の中の一人として伝える安樂房遵西の父、師秀が法然を請じて逆修をつとめた際の説法である。『法然上人御説法事』には

念仏往生は、これ弥陀如来本願の行なり、教主釈尊選要の法なり、六方諸仏証誠の説なり。(親全・輯録篇・1)・二四)

といい、三経の所説の肝要が「念仏往生」にあることを明示し、念仏は『大経』に開説することく、弥陀が因位において選択された本願に誓われた衆生往生の行であるが、その「往生の行はわれらがさかしくいまはじめてはからふべきことにあらず」、仏が「みなさだめおけること」(親全・輯録篇・(1)・八七)であって、衆生は「唯一向に仏の願力をあおぎて往生おぼ決定すべき」(前同・八九)であるとし、衆生が「今聖道をすてて浄土の一門に入る」(前同・一〇三)のは釈尊が「念仏の一行を選、別して未来の群生に流通せ」(前同)しめられた『観経』の意によるのであって、善導が専雑二修を立て、諸行の勝劣を判ずるように、衆生は「唯一向に念仏を修して雑行をすつべき」(前同・一〇九)であり、「返も本願をあおぎて念仏すべき」(前同)であると説く。而して『小経』に説く「一日七日の念仏も弥陀の本願なるがゆへに往生す」(前同・六六)るのであり、六方諸仏が証誠したまふのは「この経のみにかぎらず、すべて念仏往生を証誠する」(前同・七五)のであると明言する。かくてかかる所説は主著『選択集』の所明と同一旨趣を語るものであるといつていい。

かくして法然の選択本願念仏論は、称名念仏こそは阿弥陀仏の選択本願そのものであるとの深いうなづきである。念仏は「彼の仏の本願の行」である。したがって「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」と念仏行の独立が宣言され

るのも、念仏こそは彼の仏の願が殊に凡夫往生の正業として、選択撰取した本願の行であるという本質を確かめた深い感動に満ちた表明であることはいままでもない。「往生の業には念仏を本とす」ということも、われらがさかしくいまはじめてはからうことでなく、全く彼の仏の本願の選択であり決定である。すでに念仏は如来の選択本願の行であり、「本より仏のさだめおきて、わが名号をとなふるものは、乃至十声・一声までもむまれしめ」（親全十輯録篇・(1)・八九)んと念仏往生の本願のおんもおしである。「故にこれを修する者は、彼の仏願に乗じて必ず往生を得る」のであり、「偏に念仏の一行を選び取りて往生の本願となしたまふ」のは「念仏是勝」、「念仏易修」の故であるとし、念仏が往生の行である根源を選択本願そのものに確かめたのである。而して法然は選択本願の念仏として専らこれを修する往生の行を強調した。

先師法然上人あさゆうおしえられし事也。念仏申にはまたく様もなし。ただ申せば極樂にむまるとしりて、心をいたして申せばまいる事也。(真全・四・六七七)

まことに念仏は「様もなくただ申す」ものである。しかしながら、ただ申すといっても、それは「心をいたして申す」のであって、「ただ申す」の「ただ」はいたすらに申すことではない。「ただ」は「唯」であって、愚痴の身にとつては、唯それより他に道なしであって、そこに本願の誓約に対する疑なき信順がなければならぬ。三心章には

当に知るべし、生死の家には疑を以て所止と為し、涅槃の城には信を以て能入と為す。(真全・一・九六七)

といつて、「念仏の行者、必ず三心を具すべき」ことが明示され、また

經には三心を具して往生すと見へて候めり。この心を具せざるがゆへに、念仏すれども往生をえざる也。(真全・四・六三八)

といい、その三心を説いて

深心といふは仏の本願を信ずる心也。われは悪業煩惱の身なれども、ほとけの願力にて、かならず往生するなり

といふ道理をきき、ふかく信じて、つゆちりばかりもうたがはぬ心也。(真全・四・六三八)

と教示している。まことに老少善悪をえらばぬ弥陀の本願も、ただ一つ「信心を要とす」るのであって、ここにこそ選択本願の念仏を強調した法然の正意があったのである。

この選択本願論は法然の浄土宗独立の根源そのものであるところから、その門弟はその教義を顕彰するに苦心を払ったのである。辨阿の『徹選択集』には念仏・本願念仏・選択本願念仏の三重の義を立てて諸師・善導・法然に配し、証空の『選択密要決』における七種の選択のごとき、その用意の周到を見ることができる。それは選択本願ということとの領解、念仏の意味についての解釈の相異であったといいであろう。しからば親鸞は選択について如何に領受したのであろうか。

四

『選択集』には、先述したごとく第十六・名号付属章の私釈において巻頭以来の全十六章をうけて、浄土三経及び『般舟三昧経』にわたる八選択を挙げ、「三経共に念仏を選びて、以て宗致と為すのみ」と結ぶところである。親鸞は『愚禿鈔』に選択本願、真実報土、即得往生也と標し、選択本願を浄土三経に確かめていく。『大経』に九選択、『観経』に七選択をひらき、『小経』に五種を確認していく方法は、師教のいのちともいうべき『選択集』の選択本願論を聴受聞思し、その詮要を開顯したものであるといわなければならない。

『大経』 選択三種

| | | |
|------|------|------|
| 法蔵菩薩 | 選択本願 | 選択浄土 |
| | 選択摂生 | 選択証果 |
| 世饒王仏 | 選択本願 | 選択浄土 |
| | 選択讃嘆 | 選択証成 |

三 釈迦如来 選択弥勒付属（親全・漢文篇・六）

これは法然によって指し示された『大経』の三選択を承け、さらに展開したものであるが、『選択集』の弥陀の選択が法蔵菩薩並びに世饒王仏に分けられ、共に選択の事実が指摘されている。思うに『大経』が真実の教とされるのは「易行浄土本願真実之教」（親全・漢文篇・四）という如く、まさしく「阿弥陀如来選択本願」（前同・六）を説くからにほかならないが、それはいうまでもなく因位の本願である。それ故にその弥陀選択の根源に帰って法蔵菩薩、並びに師仏世饒王仏の選択を挙げ、選択本願の浄土が法蔵菩薩個人によるものでなく、師仏である世饒王仏の師教を諦聴するという値仏の因縁において摂取されたものであると説く『大経』の経説を聞思し、ここに他力の本願を領受したものであるとわかっていいであろう。即ち、それは『愚禿鈔』上下両巻の劈頭に「聞賢者信、顯愚禿心」と表白するごとく、その生涯をかけて師教に自らの道を聞き開いていくという仏弟子としての親鸞の根本的態度が見開かされたものでないだろうか。親鸞が特に五十三仏の伝灯を背景とする世饒王仏に依る選択本願と選択浄土を説かれたことによつて、積尊が如来世に出ずるも出でざるも、法は永遠にして常住なりと教説されたように、無始時來法界に等流するものこそ本願であることが明示されたのである。まことに法蔵菩薩はその本願の根底に深く思念されてあつた念仏の法を本願流伝の歴史において選択摂取されたのであり、念仏はそこにおいてはじめて人類流伝の歴史の上に開頭されたのである。それ故に法蔵菩薩は本願の歴史的課題を荷負して、本願の歴史の中に誕生されたといつていいのである。おそらく師仏世饒王仏が法蔵菩薩に対し、讃嘆し証成されたのも、自らが継承してきた本願の歴史的課題が果遂されていくことを法蔵菩薩の上に見出されたがために他ならなかったからであろう。

『愚禿鈔』には釈迦如来の選択について、「選択弥勒付属」が挙げられている。それはまさしくこの経の弥陀付属の経説に基づくものであるか、おそらく未來仏としての弥勒付属によって選択本願を宗致とするこの経が、十方衆生の救済を実現する永遠の宗教的眞実の道理を公開する經典として、人類の歴史とともにあらしめんとする教主積尊の

悲心を感じとった結果に基づくものである。ここにこそ真の意味における釈迦如来の選択があるというべきである。

『観経』 選択二種

- 一 選択功德 選択撰取
- 釈迦如来 選択讃嘆 選択護念
- 選択阿難付屬

二 韋提夫人 選択浄土 選択浄土機（親全・漢文篇・七）

『観経』について、釈迦如来の選択が特記され五選択が開設されていることは、親鸞が師法然を通し善導教義に触れたことを思念するとき、「玄義分」序題門に「弘願と言ふは大経に説くが如し」と説くように、弘願即ち選択本願は事実全面的に『大経』にゆずられている。それ故、ここに説く五選択の中の「選択撰取」ということさえも、善導が三心釈の第三深信に「決定して深く、釈迦仏此の観経の三福・九品・定散二善を説いて、彼の仏の依正二報を証讀して人をして欣慕したまふことを信ず」（親全・加点篇・一七二）と了解した、その釈義に基づき、釈迦が『観経』定散を説いて人をして欣慕せしめるための経説と領受したことによるものであろう。親鸞が愚身の信心の依り所として、常に尊重した「念仏衆生撰取不捨」も、釈迦の定散をほかにしてはうなずけないからである。「定善義」に「此の経の定散の文の中には唯専ら名号を念じて生ずることを得と標す」（前同・一五〇）と定散文中、唯標専念名号こそが『観経』の真の精神にはかならないと説く。それは「念仏衆生撰取不捨」の大悲一つを明らかにするためである。『観経』の選択が特に釈迦如来に集中している所以はここにあるのであろうか。

韋提夫人の選択ということは、光台現国の別選所求・別請去行について「選択浄土」の事実を確認し、ここに『観経』開説の意義を見定めたからであろう。親鸞において韋提の光台別選が注目される時、おそらくそこには

南無不可思議光 饒王仏のみもとにて

十方浄土のなかよりぞ 本願選択撰取する（親全・和讃篇・三六）

との法蔵菩薩選択の願心が憶念されていたであろうし、この法蔵選択の大悲が、釈迦如来を通してわれわれの歴史の事実となったとき『観経』の

恩徳広大釈迦如来 韋提夫人に勅してぞ

光台現国のそのなかに 安樂世界をえらばしむ (親全・和讃篇・四六)

ということが、真に成立したものと領解されたのであろう。さらに「選別浄土機」は汝是凡夫心想羸劣としての韋提の上に『教行信証』総序にいう「浄邦縁熟」・「浄業機彰」を確かめ得たからであらう。かくしてこそ如来選択の本願は十方衆生を機として真にそれ自身を成就するといわなければならぬ。「選択阿難付属」を特に『観経』の釈迦如来選択として挙げる所以はここにあるといえよう。

『小経』 勸信二 証成二 護念二 讚嘆二 難易二

勸信二者 一 釈迦勸信
二 諸仏勸信

証成二者 一 功徳証成 釈迦二
二 往生証成 諸仏二

護念二者 一 執持護念 釈迦護念
二 発願護念 諸仏護念

讚嘆二者 一 釈迦讚嘆二
二 諸仏讚嘆二

難易二者 一 難 疑情
二 易 信心

執持三已 発願三已
当今 当今 (親全・漢文篇・七七八)

『小経』については『大経』『観経』の場合と異って選択の用語が全く用いられていないのは何故であらうか。お

そらく『大経』は法蔵菩薩・世饒王仏による弥陀の選択を中心とし、『観経』は釈迦の選択に視座をおくのに対して、『小経』は釈迦を含めた諸仏を中心とすることは、『選択集』に『大経』・『観経』・『小経』の三経を次第のごとく弥陀・釈迦・諸仏に配当して領解することに基調をおくからであろう。諸仏は自らなにかを選択するというよりは『大経』の弥陀選択と『観経』の釈迦選択について、これを勸信・証成・護念・讚嘆し、難易の別を信・疑によって示していよいよその実義を明確ならしめるほかないといえよう。もとより選択は弥陀・釈迦二尊の仕事であって、さらに本質的にいえば弥陀そのものの仕事である。それ故、法然によれば『小経』は諸仏の選択として一つ「選択証成」が挙げられるけれども、選択は厳密にいえば弥陀・釈迦二尊、更には弥陀一尊といえよう。されば選択の選択たる所以は『大経』『観経』の弥陀・釈迦二尊の選択によってつぎるのであって、『小経』の諸仏についてはそれを証成するところが主となるであろう。『小経』について選択の語が用いられなかった所以はここにあるといえようか。

最後に信疑によって難易の別を開示する。ここでは徹底して何故に難行となるか、何故に易行であるかを問ひ、それに対して疑情が難行の根源となり、信心こそ易行の本質であって、信心を本質としてこそ易行が易行としてうなづかれることを明示するものである。選択易行が成就されているにもかかわらず、われわれは定散心間雑するが故に難行としかうけとれない。ここに難易の批判規準を疑情・信心に決定した領解はおそるべき響をもつといわねばならぬ。また標釈を終って「執持」と「発願」とに「已今当」の三字を以って示すのは、直前の「難易」をうけ、また「護念」の「執持護念 発願護念」を承けて、選択本願の法こそは極難信の法なるが故に、十方諸仏の護念が已今当の三世にわたるといふ遇法の慶びを物語るものであろう。かくて『愚禿鈔』には選択本願が横超真宗の根源そのものであり、それが浄土三経としてわれわれの歴史の事実となり、生死罪濁の群萌を救済する原理として活動する現働相を弥陀・釈迦・諸仏の選択の上に開顯されていることを師教に聞き確かめえた親鸞の深い感動をわれわれは窺知できよう。

『教行信証』は「よきひとのおおせをかぶりて、信するほかに別の子細なき」、その恩厚を仰ぎ、深く如来の矜哀を信知してただひとすじに師教の真を開顕することひとつにあつた。それにも拘らず、念仏を開顕する「行巻」には、法然が「本願中の王なり」とまでいいきつた第十八念仏往生の願を挙げることなく、却って第十七願を掲げて「諸仏称名之願 浄土真実之行 選択本願之行」と標榜されたのであろうか。

おそらくこのことは、ただ念仏の一行が、往相廻向の大作そのものであることを第十七願に確かめ立証せんとすることに基づくといつていいであらう。『唯信鈔文意』には、

おほよそ十方世界にあまねくひろまることは、法蔵菩薩の四十八大願の中に、第十七の願に十方无量の諸仏にわがなをほめられむとなえられむとちかひたまへる、一乗大智海の誓願成就したまへるによりてなり。『阿弥陀経』の証誠護念のありさまにてあきらかなり。証誠護念の御こゝろは『大経』にもあらわれたり、また称名の本願は選択の正因たることこの悲願にあらわれたり。(親全・和文篇・一六二)

という。ここには念仏の選択ということを通して、第十七・第十八の二願の一致が顯示されている。即ち第十七願は十方諸仏に対し、第十八願は十方衆生に対して念仏往生を誓うのであって、称名の本願ということにおいて二願は一致するという。第十八願の念仏往生の確かさは、第十七願の諸仏称名によって証誠されて、生死罪濁のこの身が行ずる称名念仏はそのまま十方諸仏の称名を根拠として、この身にあらわれ行ぜられるといつていいであらう。第十八願の乃至十念の称名は、すでに第十七願の十方諸仏の称名に順じ、これに導かれた結果にほかならない。

諸仏の護念証誠は 悲願成就のゆえなれば

金剛心をえんひとは 弥陀の大恩報ずべし

五濁惡時惡世界 濁惡邪見の衆生には

弥陀の名号あたえてぞ 恒沙の諸仏すすめたる (親全・和讀篇・五二一―三)

と讃嘆される所以であって、ここに大行の回向ということが成りたつのである。されば親鸞が「行巻」に第十八願ではなく、第十七願諸仏称名の願を標榜しているのは、師教の念仏がひとえに如来の選択摂取のゆえに、本来如来のものであり、如来よりたまわりたる行であることの根源的事実を立証するものである。

かくて師教直承の選択本願の念仏の根拠を第十七願に求め、如来の往相廻向の大行とうけとめて、これを「無碍光如来の名を称するなり」と領受しつつ、

斯の行は即ち是れ諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。故に大行と名づく。(親全・教行信証・一七)

と、真如一実の功德に帰して、それ故に大行であると定義している。ここに念仏が真如一実の功德宝海であると同じ意義内容を『一念多念文意』には次のように説示している。

真實功德とまふすは、名号なり、一実真如の妙理円満せるがゆへに、大宝海にたとへたまふなり。一実真如とまふすは、無上涅槃なり、涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如来なり。宝海とまふすは、よろづの衆生をきらはず、さわりなくへだてず、みちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとへたまへるなり。(親全・和文

篇・一四五)

ここに名号は一実真如の妙理が円満せる故に、よろづの衆生を無碍自在にみちびきたもうこと大宝海のごとしと喩え、さらに一実真如を、無上涅槃、法性といい、如来そのものに帰している。念仏が大行として最勝真妙の正業とされる所以は、それが涅槃・法性・如来そのものの妙理にうらづけられ、如来そのものの自己顕現であるという一点に求められている。如来は一実真如海のかなたにとどまることなく、「一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩と

なのりたまひて」「かたちをあらわし、御なをしめて、衆生にしらしめ」「無碍のちかひをおこし」、念仏の衆生を撰取して無上涅槃界にいたらしめんとする。「從如来生」の仏である。

されば念仏が一実真如の妙理を円満するとは、一如来生の徳にうらづけられた行であるという意味である。それ故に念仏はその本質である一如法性そのものから「たもちやすくとなえやすき名号」として動的積極的に来生し出生したものであるということが出来る。かくの如く念仏が從如来生の行であればこそ、それは淨土真実の行である。しかるにそれは阿弥陀の名であることにおいて、必ず本願を契機としなければならぬ。なぜなら阿弥陀如来は因願酬報の仏であるからである。この故に念仏は選択本願の行といわれる。まことに如来は単に如来としてとどまらず敢て自らを名に表現し、無明海に流転するわれわれに能動廻向したまうところにこそ平等の慈悲が動き、選択本願が仰がれ、「大悲の願」が感ぜられる。この故に念仏は選択本願の行であり、大悲の願より出づる往相廻向の大道である。如来廻向の大道であるかぎり、それは諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられたわれわれの人間行とは全く異質のもので、われわれとしては「念仏には無義をもて義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」というほかはない。かくて往相廻向の大道によって開かれゆく無碍の一道を「行巻」には次の如く説く。

爾れば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大槃涅槃を証す、普賢の徳に遵うなり。知る可しと。(親全・教行信証・七〇)

ここには、ただ念仏して無碍の仏心に生きる身に、はるか滅度大涅槃の世界が見通され、還相普賢の徳までが内感されていく。これこそ、ただ念仏ひとつに生きる身に開かれる無上の慶びであり深い感動であるといっている。

南無阿弥陀仏の回向の 恩徳廣大不思議にて

往相回向の利益には 還相回向に回入せり (親全・和讃篇・一八三)

と歌嘆される所以である。

まことに回向とは「本願の名号をもて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり」（親全・和文篇・二二七）であり、如来が名をもって回向するのである。それは「発願回向と言ふは、如来已に発願して、衆生の行を回施したまふの心なり」（親全・教行信証・四八）との意味である。しかも、如来の回向は、行・信、因・果、往・還のそれぞれを個別に回向するというのではなく、それはただ一つ南無阿弥陀仏の回向ということであって、それこそが称無碍光如来名の大行の回向そのものにほかならない。それ故、大行の行ぜられる身、ただ念仏の申される身においてこそ、行信因果往還のすべてが「阿弥陀如来の清淨願心の回向成就」と領かれ、ここに念仏成仏の仏道、真宗が確められる。

されば親鸞は選択本願ということを単に法蔵菩薩が四十八願の一々を取捨し選択して誓ったという意味における選択というだけでなく、却って一実真如が悪業煩惱の衆生界に即して自己を限定して従如来生し、流転輪回の衆生救済の法を本願として選択されたことを意味し、衆生はこの如来の選択において真実の行信、如来大悲回向の行信に帰し、大小聖人・重軽悪人・皆同じく齊しく選択大宝海に帰して念仏成仏すべし。（親全・教行信証・六七）という救済が成就することを顕わすといえよう。

海と言ふは、久遠より已来、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、逆謗闍提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海と成る、これを海の如きに喩ふるなり。良に知んぬ、経に説いて、煩惱の氷解けて功德の水と成ると言へるが如し。（親全・教行信証・七八）

というのは、その救済の構造を示すものであり、この旨趣こそが「とりかえし／＼」『唯信鈔文意』、『一念多念文意』に顕わされている。かくて選択本願における衆生の選びとしての宗教的決断と回心の体験を語るものが三願転入の告白にほかならない。三願転入の文と『選択集』総結三選の文の間には、極めて緊密な内面的呼応関係が見出されるのであって、それを一貫する根本問題こそ、まさしく念仏の奥義としての選択本願にほかならない。